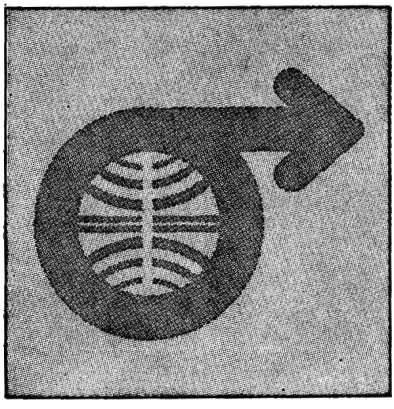
日本貿易論

〔増補版〕

中央大学教授　早川広中著



東京　白桃書房　神田

著者略歴

早川広中（はやかわ ひろなか）

一九三五年　東京に生まれ、会津若松市に疎開する。
一九六一年　中央大学法学部、早稲田大学大学院商学研究科卒業。千葉商科大学助教授、中央大学助教授を経て、現在、中央大学教授

現住所　〒180　武蔵野市吉祥寺北町三―一一―二〇

著者との申し合わせにより検印省略

昭和五十一年十二月十六日　初版発行
昭和五十五年四月二十六日　三版発行

日本貿易論〔増補版〕

著者　早川広中
発行者　大矢順一郎
印刷者　内山一郎

＊　＊　＊

〒101　東京都千代田区外神田五―一―一五
発行所　株式会社　白桃書房
電話（〇三）八三六―四七八一（代）
振替　東京〇―二〇一九二

落丁・乱丁本はおとりかえします。　総合図書目録贈呈
昭文堂印刷／浦野製本

書籍コード　3063―663194―6915

序　文

本書は、日本貿易学会、中央大学経済研究所年報などに発表した論文に、若干筆を加え、それを簡潔にとりまとめたものを中心として、主として、日本貿易論の講義の補助書を目的として、出版するものである。

一般には、第一編の日本貿易の歴史を中心とした著書（日本貿易論）と、第二編の現代日本貿易を中心とする著書（現代日本貿易）が出版されている。目的および方法論の上から当然とは思われるが、日本貿易論の一年間の講義では多少の無理はあるが、両方を取り扱うのも一つの考え方と思い、強引すぎるきらいがあったが、二編を一冊の本にまとめた。

したがって、本書の構成・内容は、第一編は日本貿易の歴史を取り上げ、第二編は現代日本貿易の基礎知識と、現代の貿易政策を取り上げた。なお、最後の章に、日本貿易の進路について金森久雄氏などの論文を紹介した。

国際化されつつあるわが国経済にとって、日本貿易の理解が必要条件となりつつあるので、今後は多くの日本貿易の研究がなされることを願っている。

思い切って出版に踏み切ったものの、日本貿易の考察に経験の浅い私では、著書として出版するにはあまりにも重荷であることを十分に認識しているので、識者から多くの助言と批判を仰ぐべき余地があると思われる。

終りに、今まで、直接間接に暖かく御指導を賜わった故中島正信（早稲田大学名誉教授）先生をはじめとする諸先

生に対して、この機会に心から感謝申し上げます。また、出版にさいしてお世話になった白桃書房の照井規夫氏にも謝意を表したい。

一九七三年三月

早川広中

増補版への序

本書の旧版が刊行されてから四年の歳月が流れた。この間、一九七一年のドル・ショックとその後のフロートへの移行、つづいて、一九七三年の石油危機により国際経済の激動期を迎えた。したがって、今回新たに第七章（国際収支）を補足し、日本経済の高度化の結果が国際収支の変化をもたらし、貿易収支の天井と資本流入の債務国から、貿易収支の大幅黒字現象と資本流出という債権国段階にいたったことを重点において説明をした。もとより紙数に制限があるので、代表的と見られる学説の紹介のみになってしまった。その他、貿易構造、特恵関税なども若干加筆をした。筆者の不敏のため、いたらない点があると思われるが、今後も識者からの多くの助言と批判を仰ぐべきことを願っている。

一九七六年十一月

早川広中

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目　次

序　文

第一編　日本貿易史

第一章　幕末における日本貿易……三
第一節　幕末開国までの日本貿易……三
第二節　開国後の日本貿易……六
第二章　明治時代における日本貿易……一七
第一節　通商条約による日本貿易への影響……一七
第二節　日本資本主義の特質による日本貿易の特殊性……二三
第三節　日本貿易史における段階区分……二八
第四節　明治時代における日本貿易……三一
第三章　大正時代における日本貿易……三九

第一節　独占段階の形成から第一次世界大戦までの時期……三九
第二節　第一次世界大戦後恐慌の時期……四二
第四章　昭和前期時代における日本貿易……四七
第一節　第二次世界大戦前の時期……四七
第二節　第二次世界大戦中の時期……五〇
第五章　連合軍管理下の日本貿易……五三
第一節　序説……五三
第二節　全面管理下の時期……五四
第三節　部分的民間貿易……五五
第四節　単一為替レートの設定による時期……五七
第六章　経済自立期の日本貿易……五九
第一節　朝鮮戦争によるブーム時期……五九
第二節　朝鮮戦争ブームの反動時期……六一
第七章　高度成長期の日本貿易……六三
第一節　序説……六三
第二節　世界貿易の傾向……六七

第三節　高度成長の時期……七一
第八章　開放体制に向う日本貿易……五五
第一節　供給力超過型成長の日本経済……五五
第二節　開放体制に向う時期……六六
第九章　新次元の日本貿易……九九
第一節　輸出依存型の日本経済成長……九九
第二節　新次元の日本貿易……八〇

第二編　現代の日本貿易

第一章　わが国の貿易構造……一一
第一節　序　説……一一
第二節　わが国貿易の商品構造……一三
第三節　わが国貿易の地域構造……一六
第二章　輸出成長率……一九
第一節　輸出成長率と所得水準……一九

第二節　輸出成長率の国際比較……一二四
第三章　国際分業と比較優位……一二九
第一節　序　説……一二九
第二節　生産要素賦存説……一三〇
第三節　レオンチェフの逆説……一三一
第四節　生産要素賦存率以外の要因による比較優位の決定説……一三三
第四章　国際競争力……一三五
第一節　序　説……一三五
第二節　輸出拡大と国際競争力……一三七
第三節　価格競争力……一三七
第四節　非価格競争力……一四三
第五章　景気変動と貿易……一四七
第一節　景気変動と輸出……一四七
第二節　景気変動と輸入……一四九
第六章　経済成長と貿易……一五三
第一節　経済成長と輸出……一五三

第二節　経済成長と輸入……一五六
第七章　国際収支……一六一
第一節　経済発展と国際収支構造……一六一
第二節　わが国の国際収支……一七一
第八章　日本貿易政策(一)……一七五
第一節　貿易政策の基本……一七五
第二節　わが国貿易政策のあり方……一七七
第三節　日米貿易……一八〇
第九章　日本貿易政策(二)……一八七
第一節　関税政策……一八七
第二節　貿易の自由化……一九〇
第三節　資本の自由化……一九二
第四節　特恵関税……一九七
第五節　新国際ラウンドと輸入制限……二〇四
第十章　日本貿易の将来……二〇九
第一節　ローマ・クラブの提案と世界……二〇九

第二節　日本貿易の進路……二二
第三節　一九七〇年代の世界経済と日本貿易の進路……三二
索　引……三五

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第一編　日本貿易史

第一章　幕末における日本貿易

第一節　幕末開国までの日本貿易

まず、幕末の開港を経済的にみると、それまでに鎖国によって相互に絶えていたわが国の経済と欧米経済との全面的接触であって、とくに、それが封建的経済体制と、すでに産業革命を経て高度に発展を遂げていた欧米の資本主義的経済体制という、二つの異なった経済体制の接触であるところに重要な意義がある。

開港は、いうまでもなくわが国の自発的意志によってではなく、まったく欧米諸国側の強制によって行なわれたのであるから、開港の経済史的意義を知るためには、まず、わが国の開港を必要にした世界経済状態をみなければならない。

当時における世界経済の歴史的出発点となったのは産業革命であった。この産業革命は、一八世紀の後半にまずイギリスに始まって、やがて他の欧米諸国に波及した。工業の機械化による生産力の飛躍的増大は、常に市場の拡大を必要とした。

この事情は、最初の在日イギリス公使として、イギリスの産業資本のために重要な役割を果たした、オールコック

の「我々の商業は死活の欲望を供給する。ここにおいて、それが危険と経費を伴なうが、我々はいたるところにおいて貿易を探求する。我々の不断に増大する欲望と生産力とに応ずべく、新しい不断に拡大する市場を求める。」という言葉においてもっとも明確に表現されている。

したがって、インドは征服され、中国大陸は侵略されたのである。中国大陸の近くにあるわが国が、このような欲望の前に、いつまでも鎖国の状態にあることが不可能であった。

以上のごとく、わが国の開港の出発点は、世界経済上よりみると、まさに産業革命にあったのである。産業革命後の経済情勢は、イギリスを先頭とする欧米資本主義国をして、自己の利益のための世界経済秩序の建設を必要にしたのである。

この世界経済秩序工作が東におよんでインド、中国大陸の侵略となった。そして、わが国の開港もこのような運動の東への発展の結果として行なわれたのである。すなわち、わが国の開港は、それを要求した側からいえば、欧米産業資本の市場としてのわが国の開放であったのである。(1)

つぎに、幕末の日本貿易を考察する前に、開国以前の日本貿易をみる。

鎖国以前の日本貿易は、日本歴史の著名な学者として知られているオスカー・ミュンシテルベルク博士の指摘によると、第一期は、一五四二年（天文一年）から一六〇〇年（慶長四年）で、中国・九州の諸大名が随意に南蛮・朱印船貿易を営んでいる。

第二期は、一六〇一年（慶長五年）から一六一五年（元和元年）にいたる一六年間で、中央政府と外国との自由貿易時代であり、茶屋四郎次郎などによる東南アジア貿易時代である。

第三期は、一六一六年（元和二年）から一六三九年（寛永一六年）にいたる二四年間で、徳川幕府がようやく貿易制限策を採用し、貿易禁止を決定するにいたった期間の制限貿易時代である。(2)

つぎは、いうまでもなく鎖国時代を迎えるのである。この間の二二〇年間は、オランダ船と中国船による若干の統制貿易が残されている。

この時代、一七一五年（正徳五年）の例をみるとつぎのような貿易が行なわれた。銀高で唐船六、〇〇〇貫、オランダ船三、四〇〇貫、合計九、四〇〇貫である。

つぎに、一八一三年（文化一〇年）では唐船三、五〇〇貫、オランダ船一、七〇〇貫、合計五、二〇〇貫となっていた。

銀一五匁を一分として、一ドル三分替とすると、この数字は二〇九、〇〇〇ドルおよび一一四、〇〇〇ドルとなる。この銀高の全部が物品で引渡されたとすると、転出入の総額は、この倍額の四〇〇、〇〇〇ドルおよび二〇〇、〇〇〇ドルとなった。

この時代よりの物価変動は少ないので、開国後の貿易と比較すると興味ある数字である。

だが、この鎖国状態を続けている間に、欧米諸国は初期重商主義国から資本主義的経済体制の時代に大きく転換して、アメリカなどの和親条約、通商条約の要求から締結による開国を迎えることになった。(3)

第二節　開国後の日本貿易

一八五八年（安政五年）の日米修好通商航海条約によって、貿易の拡大が始まるのであるが、条約は資本主義発展段階の興隆期にあった欧米諸国の強制によったことにより、あらゆる点で対外的に自主性を欠いていた。

そのため、居留地における治外法権の設定にしても、領事裁判権の広義解釈の問題にしても、西欧的な慣行の押しつけであり、力関係において余儀なくされたものである。

貿易において関税自主権がなかったこともその一つであり、その後の日本経済発展に大きな支障となった。(4)

このように、不平等条約による開国であるが、わが国の貿易は鎖国時代より急激に増大することになった。

開国後の貿易額は資料が十分に整理されていないが、石井孝著の『幕末貿易史の研究』、山口和雄著の『幕末貿易史』の両著が比較的整理されているので、参照に示す。(第1表)

この貿易額全体についてみるならば、イギリス代理領事ヴァイスが初めて横浜港に到着した一八五九年(安政六年)七月には、同港に二隻のイギリス船と一隻のオランダ船をみるのみであったが、一八六三年（文久三年）には、第1表を参照すると輸出は一二、一二〇、〇〇〇ドル、輸入は三、五八〇、〇〇〇ドルになる。

一八六七年（慶応三年）には、輸出は一二、一二三、〇〇〇ドル、輸入は一八、四七六、〇〇〇ドルに激増した。試みに、一八六〇年と一八六七年とを比較すると、この五年間に輸出額は約二倍になり、輸入額は約五倍の急増である。

このような急激な拡大はその後もほとんど例のないことである。したがって、いかにも極東の封鎖国家が世界経済

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com